

【新連載】

女性検事が見る真実

捜査官へのヒントその①

人を知るには……

松木 麗



思うところあって、週一回、心理学の講座に通っている。講義を一通り聞いたあと、カウンセリング演習が始まった。

「これは本当にあつた話で、三〇年連れ添った夫婦の会話です」
と先生が言う。

「三月末でした。奥さんが庭を見ていて、『あなた、そろそろ桜が咲きますね』と話しかけました。返ってきた言葉は、『それがどうした』」

吐いて捨てるような口調の「それがどうした」。三月末とて、夫には、リストラその他嫌なことがきつとあつたのかもしれないが……。

しかし、夫にそう言われて、妻はどんな気持ちになつたか。この夫婦はどうなつたか——という設問である。

カウンセリング演習とは、要するに聴き方の訓練である。話し手(相談者)を聴き手(カウンセラー)がきちんと受け止めること、それがカウンセリングの基本である。

話を聴いてくれている、真意が伝わっていると相手を感じ取れるようにすること、そのためには、いろいろな形の相づちをタイミングよく打ちながら、表情や動作で、私はあなたの話をちゃんと聴いていますよ、と知らせなければいけない。

やつてはならないことは、この反対つまり、拒絶、無視、否定(話を信じない)、的はずれな応答、自分の話をする、といったことであるという。

聞きながら、はたと思い当たつた。そう、「取調べ」である。

新任のとき、同室のやはり新任が、被疑者の弁解をはなから信用しなかつた。「あなたはそうは言いますが、でも……」の調子で、聞きながらはらはらしていたら、やはり激しい応酬になつた。そして、ついに被疑者からきつぱりと宣言されてしまつたのである。

「じゃあ、いいですよ。どうせ俺が何を言つても信用しないんですよ。俺はもうしゃべりませんから」

彼は本当にその後一言もしゃべらなかつた。検事の否定に対し、彼は拒絶で対抗し、二人の会話、つまり人間関係はそれで終わったのである。これはかなり極端な例だが、近い失敗例は案外あちこちに転がっているかもしれない。

はからずも先日、特捜部歴一〇年を超えるベテラン検事がこう言つた。

「取調べのコツは、相手の言うことを否定しないことですよ」

「相手」が国会議員や会社役員など、一応の理屈が通る人だという前提はあるにしろ、これは至言ではないかと思う。

「割り屋」のテクニクは、個性次第で様々だが、共通項はある。事件及び相手への真剣な取り組み、真摯に聴く態度、などである。

「割り屋」で有名な某検事が、状況証拠しかない常習累犯窃盗事件を扱つた。検事三十代半ば、被疑者四十代半ば。検事はまずじっくりと相手の弁解を聴いた後、不合理な点を突いていく。自然激しい応酬となり、ついに検事が叫んだ。

「俺が知りたいのは、ただ本当のことなんだ」

その直後である。被疑者が素直に頭を垂れたのは。「俺がやりました」

被告人となつた彼は、検事に長い手紙を書いて送つた。懸命な字で綴る。

「〇〇検事さんに会えて本当に良かったです。絶対に今度こそ立ち直つてみせますから」

捜査官对被疑者といつても、基本は人間関係である。それがこなせてはじめて、応用版もこなせるというものである。

昔から「話し上手は聞き上手」という。相手のボールをミットの芯に受け止めるには、まず真摯に耳を傾けることである(拒絶、無視、否定をしない)。

意味が不明ならば聞き返す。自分勝手な解釈で適当に答えていたのでは、相手は、これはちゃんと聴いてくれている、この人にしゃべつても無駄だなと判断してしまう(的はずれな応答をしない)。また、聞き上手は自分から決して話し上手になろうとしないものである(自分の話をしない)。

さて、冒頭の設問の答え。妻はこう思つたそうである。ああ、

この人には何を言つても無駄だわ、と。夫の拒絶で、会話は一方的に打ち切られた。この一見小さな「事件」が、妻に離婚を決意させ、三〇年間綿々と続いた夫婦の歴史が幕を閉じたというのだから、考えてみれば怖い話である。

「私、心理学を習い始めたのよ」と言う、と、男友だちの一人が叫んだ。「それ以上男の心理を分らないでくれ」

まさか。私が心理を読めるのは、机上の勉強の賜ではないのですよ。人を知るにはまず、一生付き合う己を知ることである。その目で他人を観察する。職場は日々これ貴重な勉強の場である。



卒業。八〇年、司法試験合格。
八三年、検事任官。
九二年、推理小説「恋文で横溝正史賞受賞、著書には『紫陽花の花のごとくに』、『事件が語る』、『生と死』、また最新刊の『少年被疑者』(学陽堂)はベストセラーとなっている。九月中旬にエッセイ集『女と男』の検事調書(調書社)も発刊予定である。

女性検事が見る真実 捜査官へのヒントその②

犯罪被害が及ぼす心への影響

松木 麗



若い父親が子供二人を殺害した。

パチンコ狂いに愛想を尽かした妻が
実家に帰つてすぐのこと、前途を悲観
して短絡的な凶行に及んだのだ。後追
い自殺を図つたが格好だけで、もちろ
んひとり無傷で生き残つた。

妻は、胸が張り裂けそうな悲しみと
夫への激しい怒りで気も狂わんばかり
だったはずである。が、私の前にある
のは何の表情もない能面のような顔だ
つた。尋ねたことにぼつぼつと答えて
くれるだけ。手応えは何もない。

ショックなのは分かるが、なぜこう
まで反応がないのだろう――。

中学三年生の処女が、不良らに輪姦
された。

その後、犯人らと深夜ドライブし、「女
の髪の毛が出る」というので有名な某ト
ンネル」まで、自分で行きたいと言
だして行つたのだという。

変わつているなと思つていたが、果
たして、年よりはるかに大人びて見え
る彼女は、実に淡々と、まるで他人事
のように話をする。

「犯人たちが憎くないの？」

「別に……」

口癖なのか。以前からこんなに投げ
やりで無表情なのだろうか。だから、
こんな奇妙な行動を取つたのだろう

か――。
八年間にわたる検察官時代、強姦の
被害者や殺人事件の遺族に、よく思つ
たものである。

なぜ、こうなのだろうと。

心に引つかりながら、私はその答
えを長らく見いだせずにはいた。

ト라우マ（心的外傷）という言葉が

聞かれた方は多いだろう。個人の対処
能力を超える大きな打撃を受けたとき
にできる精神的な傷のことである。も
たらずものは、戦争、犯罪被害、虐待
事故、災害など。

原因や人によつて反応は異なるが、
それでもその個性を超えて、トラウ
マの後に起こる反応は共通している
という。PTSD（心的外傷後ストレス
障害）――この言葉が日本で市民権を
得たのは、阪神大震災とサリン被害以
後のことである。

患者は、事故の記憶が自分の意思と

は無関係に「侵入」的に蘇ることで苦
しめられる。その苦痛を避けるため、
様々な「回避」をしようとする。そして
「不眠」――がPTSDの主症状である。
犯罪被害の場合には、これに加えて、
さらに特殊な症状が起こる。羞恥、自
責の念、自己評価の低下など。先の妻
は自責の念に打ちひしがれていただろ
うし、中三の奇妙な行動は、加害者へ
の同調（人質の被害者によく起こる）
を起こしたケースだったのではないか。
加えて、警察、検察、裁判所などの刑
事司法機関とマスコミによる二次的な
被害がある。

特に、トラウマの後の急性期には特
殊な症状がよく見られるという。

その一つが、感覚や感情の麻痺である。
性犯罪の被害者や殺人などの遺族が
淡々としているのは、気丈なからでも
冷たいからでもない。あまりのショッ
クで、冷たさや暑さ、痛さといった感
覚も、感情も麻痺するのである。

離人感（現実感の喪失）が起こるこ
ともある。自分が自分でないような感
じ。強姦の被害に遭つてるとき、自
分の体が自分から抜けだし、自分を見
下ろしているような感覚を多くが覚え
るそうである。

心因性の健忘もよく起こる。被害者
が肝心なことを忘れていて、不思議に
思われたことはないだろうか。

一つ一つ説明されれば納得がいく。
こういう「解離症状」は、つらすぎる
体験を意識から排除することで精一杯
自分を保とうとする、自己防衛本能の
なせる業ではなからうか。

よくぞ今まで、こんなことを知らず
に取調べをしていたものと、恥ずか
しさと恐ろしさでいっぱいになる。被
害者の気持ちにできるだけなりきろう
と努めてきたつもりだったが、自ら被
害体験のない身では限界がなかったは
ずもない。つまりそれだけ、犯罪の被
害は想像を超えるということである。

被害者に必要なのは、ありのままの
その苦しい状態をただ受け止めてくれ
る相手である。それなのに、禁句である
「元氣を出して」を安易に口にして、ど
れほど傷つけてきてしまったことだろう。

悲しいかな、警察も検察も、最重要
「証拠」である被害者の供述を、細部に
わたつて取らなければならぬ使命が
ある。だが、その心を知つた上でと、
そうでないのでは、対処の仕方が天
と地ほどにも違う。

つくづく思う。生身の人間を極限状
態で扱う私たちは、およそ何でも知っ
ておくべき責務があるのだと。

参考文献：小西聖子著「犯罪被害者の心の傷」
（白水社）など



生れ。神戸大学卒業。八〇年、
司法試験合格。八二年、検事任官。
九二年、推理小説「悪文」で横
溝正史賞受賞。著書には「陽陽
花の花のごとくに」、「事件が語
る「生と死」、少年被害者」そ
して最新としてエッセイ集「女
と男」の検事調査」を上梓した。
著者略歴
現職検事。五五年

女性検事が見る真実 捜査官へのヒント

心で取る身上調査書

松木 麗



早いもので、検事に任官してからすでに一四年が経つ。当時女性検事は三〇名もいなかったから、なぜ検事に？とよく尋ねられた。その後飛躍的に数が増えて今は一〇〇名を超す勢いだから、もう大して珍しがられることもない。ただ、それでもやはり一般人には検事は相変わず珍しい存在である。私が取材をよく受けるのは検事だからで、取材者のほとんどが、検事に会ったのは初めてだと言う。全国一二〇〇名の数では、友人知人にいるということも稀である。

さて、なぜ検事になったのか？理由はいくつかあるのだが、やはり「人間が好きだから」。法律家は皆そのはずだが、裁判官だと公開の場で、それも一段高い所から、儀式にのつとつたよそゆきの言葉が聞けるだけである。弁護士だと直接関わられるが、同時に金も絡んでくる。純粹かつ直接に人間に関われるといえ、それはやはり検事である。

検事が警察からの送致記録を最初から最後まできっちり読むのはもちろんだが、なかで最も興味をもつて熱心に読むのはどの部分か、お分かりだろうか。これを検事ではなく弁護士としてもいい。裁判官でも答えはたぶん同じである。「身上調査書」である。ある裁判官がこんなことを言っていた。

もちろん法定刑の幅が広いから、罪体の証明だけでは適正な量刑が決められないという、技術的な理由はある。だが、ではなぜそもそも法定刑の幅がそれだけ広く決められているのだろうか。いうまでもなく、刑事司法と国民性とは切っても切り離せない関係にある。我々は、犯罪における「心」、つまり犯罪者その人を扱わねばならないと考える国民なのではないだろうか。

「身上調査書」である。ある裁判官が

人から切り離された犯罪をクルールに罰するのではなく、それを犯した者をホットに罰する。彼（女）が真犯人なのかどうかは絶対に誤ってはならないことだが、それにとどまらず、なぜその犯罪を犯すに至ったのかを解明しなければ、彼（女）を真の意味では更生させられない。いくらの何をどの手口で盗んだのなら懲役はこれだけ、はいおしまい、とはならないのである。ここで捜査官に要求されるのは、人間である捜査官が犯罪を犯した人間に体当たりでぶ

つかる、しんどい作業なのである。熱心な水も漏らさぬ捜査官は、例外なく身上調査書も丁寧である。それだけ丁寧に被疑者にぶつかっている証なのだろう。たまに身上調査書が洩れ洩れで、冒頭陳述書の第一「被告人の身上経歴」がきれいに埋められないことがある。そういうときは、抜けた所だけ取るのも恰好悪いので、最初からきれいに取り直す。もちろんわざわざ調査書を取らないにしても、相手の身上は検事自らよりよく知るべきである。

ところで、よほどのことがない限り私は病院に行かない。扱いがモノのようで嫌だからである。問診がほとんどなくてすぐに検査と薬。いつから医療は体だけを、それも人間が直接ではなく機械で診るものになってしまったのだろう。体と心は一体だし、人間は、人間が直接体当たりでぶつかってみてはじめて心を開くものなのに。そうしてみてもいい結果が出るかどうか分からないらしい難しいものなのに。心を忘れてなぜ人間の「治療」ができるのだろうか。

社会の病人を診る我々は、いつまでも愚直なほど、心を求める姿勢でいつか



松木麗 著者略歴
現職検事、五五年生まれ、神戸大学
卒業。八〇年、司法試験合格。
八三年、検事任官。
九二年、推理小説「密文」で横
溝正史賞受賞。著書には、紫陽
花の花のごとくに、「事件が語る
生と死」、「少年被疑者」そ
して最新刊としてエッセイ集「女
と男」の検事調査書（二二〇頁参
照）を上梓した。

女性検事が見る真実 捜査官へのヒント④

沈黙の意味

松木麗



孔子曰く、四十にして惑わず……。なんてとんでもない。最近になってようやく、自分という人間がだんだん分かるようになってきたくらいである。そんなことを言つてあきれられるかと思つていたら、同じ年頃の友人たちが口々に言う。いい（わ）ねえ、自分はまだ分からないのだと。

考えてみれば、もともと「我」は分りにくい存在である。これが他人から厳しい目で見ると、嫌なら切り捨てればいいけれど、自分とは生きている限りつき合ひが続く。となると、そういう厳しい目ばかり向けていては絶望的になり、はては鬱病や自殺となりかね

ない。結局、いい加減なところで、まあいいか、なつてしまふのである。自分かわいさは、自我防衛の一種でもあるのだから。自己の主観的評価は客観的評価の二―三割増しくらいにはなるものである。

実はごく最近、私は自分が気が短いということをはつきりと認識したのである。何度か気が短いと言われたことはある。そして、長いとは自分でも思つていなかった。どれほど美味で評判の店でも列には並ばないし、人を待つのは最長三〇分（恋人で一時間）。とにかく待つという行為が嫌いなことから、気が長かろうはずはない。それでも私は

自分が気が短いとは思わなかった。そうではなく、気が早いと思つていたのである。自分が待つのが嫌だから人を待たせるのも大嫌い。だから、約束や時間は必ず守る。もらつた手紙の返事はすぐに出す。これは長所ではないかと。私が週一回心理学の講座に通つているという話は第一回で書いた。

先日、実際のカウンセリングの様子をテープで聞かされた。患者（声は吹き替え）は、自殺を図つた二〇歳の女子学生で、最初のうち自殺願望とやる気のなさをけだるそうにとつとつと語つていたが、週一回のカウンセリングを四か月続けるうち、徐々に肯定的な態度を見せるようになっていく。

驚いたのは治療者の態度である。とにかく気が長いのだ。患者のぐだぐだした（と思える）訴えにじつと耳を傾け、相づちを打ち、訴えを繰り返し、あるいはその意味を明確化する、という作業を気長に続けていく。訴えを解

釈したり、死ぬなんて駄目ですよ、もつと前向きに考えられませんか、なんという台詞は絶対に口にしない。禁句なのである。

二人の間にはしょつちゅう沈黙がある。患者が黙つても治療者は先を促さない。患者が再び口を開くまでただ待つのである。それが時に二分にも及ぶに至つては、私はいらいらしてきて、早回しをしてよ、時間がもつたないじゃない、とその度ごとに心の中で叫んでいた。終わつて、受講者の一人が「沈黙」について質問した。先生が答える。

「ええ、沈黙はとても大事なことです。この間に患者はいろいろ考へて、思考を言語化する作業をしつていますから」

あつと思つた。そうなのだ。テープでは分からないだけで、二人は身振りなり表情なりでやり取りをしていたのだ。治療者はそこから言葉以上のものを読み取つていたかもしれない。沈黙

はゼロではないのである。

このとき、私は自分の気の短さをはつきり認識したのである。

思い出したのだ。取調べのとき、私がいちばん嫌いだつたのは沈黙だというところ。気長に待てなくて、私はよく自分から口を挟んだものだった。待つときも多分にいらいらしていた。だが、私の認識が足りなかつただけで、沈黙は互いに意味のある大事な時間だつたのである。少なくともゼロの時間ではなかつたのは確かである。

今でもはつきり覚えてるのは、とんでもない未成年の少女に畳みかけて説教した挙げ句、完全に黙らせてしまつたことである。この検事は怒つて居るのだと、彼女は冷静に見ていたのだから。

孫子の兵法曰く、「彼を知り己を知らば、百戦殆（あや）うからず」。敵を知るより、己を知るほうが難しいのではないだろうか。なぜ私は自分の気の短さをずつと認識しなかつたか。気が早

いは気が短いと同義だとなぜ考えなかつたか（面白いことに、気が遅いという形容はない）。答えは「自分かわいさ」。他人の形容には容赦なく悪い言葉を使つても、こと自分には無意識にしろよりソフトな言葉を選んでる。気が短いでは、まるで手の早い粗暴犯みたいではないか。だが、ようやく分かつたのだ。私は気が短いのだと。そう自分を直視すると、いろいろな言葉が急に身近になつてきた。「短気は損気」、「怒りは悪い助言者である」（フランスの諺）。また、ジエファーンソンがこう言つて居る。「怒りを感じたときは言葉を発する前に十を数えよ。時にはさらに百まで数えよ」と。



著者略歴
現職検事。五十五年
生まれ。神戸大学

卒業。八〇年、司法試験合格。
八三年、検事任官。
九二年、推理小説「恋文」で横
溝正史賞受賞。著書には「探偵
花の花のごとくに」、事件が語
る「生と死」、少年被疑者、そ
して最新刊としてエッセイ集
「女と男」の検事調査を上げ
した。

女性検事が見る真実 捜査官へのヒント

新しい年を迎えて



松木麗

明けましておめでとうございます。
そう、生きて元気で新しい年を迎えられて本当におめでたい。でも、本当のことを言うと、とんと感慨が湧かないのだ。

思い出す十代までの「お正月」。気ぜわしい年の瀬。大晦日までにしなればいけないことはたくさんあったのに、やり残した焦りのうちに聞こえてくる除夜の鐘。目覚めた朝の、凜と冷たい空気。まつさらな年。その中で机の前に座り、去年一年を反省し、新年の抱負を綴り、今年こそはと決意したものだ。

今年こそは、今年こそは……。良き昭和三十年代、四十年代、この国自体

ろう。
まあ、それでも物事は悲観的より楽天的に考えるに越したことはない。と、悟りとも居直りともつかぬことを思うようになってからはよけいに、反省にも抱負にも縁遠くなってしまった。当然である。

◇
検事になってしばらくは——少年事件は別として——自分より年上の被疑者のほうが多かった。それが徐々に割合が逆転していき、その分取調べも楽になった。

初めて同い年の被疑者を前にしたときのことによく覚えている。
通帳を盗んで下ろし、の常習犯。逮捕手続書には一見「二九歳(実年齢)」とあったが、気弱そうな、既に人生に疲れ果てたような男は、どう見ても年よりずっと老けている。ほとんどの犯罪者がそうなのだ。向上心のない自堕落な生き方は人間を確実に老けさせる。張りのある前向きな人生を歩んでいる

があすなるの木だった。
地球の温暖化に伴って、今や正月は暖冬の中にある。年中無休の店まであつては、買い出しもお節料理もなく……限りなく普通の日々に、反省も抱負も綴らなくなってずいぶんになる。
もちろん、自分が年を取ったせいもある。

年を取るとともに一年の経つのが早くなる。エネルギーの消費量とも関係して、これにはちゃんとした生物学的な理由があるらしい。時間は誰にも平等というわけではない。年を取るにつれ、あまりに早く新しい一年が巡ってきて、感動というより驚きや焦りのほうが強くなったのかもしれない。

人がみな、年より若く見えるのとそれはまさに対照的である。
机を挟んでかつての同級生と対峙している——不思議な感動があった。

今でもよく覚えている六歳のあの日。満開の桜に見守られ、同じように親に連れられて入学式に臨んだはず。同じように机を並べて勉強し、同じ日に卒業して、また同じ日に中学に進み……。彼も私と同じように、たぶん学校の作文か何かで将来の夢を書いたことだろう。少なくとも心の中で自分の将来を思いはしなかつただろうか。

そのとき彼は、自分の将来を今のようなものになると予測していただろうか。いや、そんなことはない。まっとうな人生を送りたかつたはずだと思う。そう、人間はみなそう思っているはずなのだ。きつと心の底では。
彼に今ある人生を送らせたものは何だつたのだろうか。

◇
年が巡ると、また一つ年を取る。年を取るにつれ、体力が落ちる。疲れが取れにくくなる。目も悪くなる。記憶力も落ちる。もちろん容色も衰える。嫌なことばかりのようだが、面白いこともたくさんある。

まず、生きることがずいぶん楽になった。「亀の甲より年の功」とはよく言ったもので、人や物事への対処に慣れてくる。自分のことも最近やつと少しは分かつてきたようだし、人間や人生がやつと少し見えてきた。少しはまともな文章が書けるようになったと思えるのもやつと最近のことである。

天文学的確率でこの世に誕生できたことを心から感謝している。せいぜい長生きしたいものだと思う。五年後、一〇年後、自分はどんなことを考えているだろうか。だから、健康にだけは気をつけようと思いつつ……。毎日運動もせずにグルメのし放題だから、そのうちきつと付けが回ってくるのだ

今、ここに一人の人間がいる。
今そのときだけを見れば「点」の存在かもしれないが、その背後に、誕生から今に至る長い「線」がある。線は一日の積み重ねの一年と、その一年の積み重ねの一〇年、さらに何十年でできていて、誰であれ、その積み重ねがあるその人を作っている。

そして、線となる時間は決して平等ではない。同じように人生は平等では決してない。
新しい年になっても相変わらずこれといった抱負はないけれど、一日一日を大切に積み重ねていこうという思いだけははずつと持ち続けていたものだと思う。



著者略歴
現職検事。五五年生まれ。神戸大学

卒業。八〇年、司法試験合格。
八三年、検事任官。
九二年、推理小説「恋文」で横溝正史賞受賞。若書には「紫陽花の花のごとく」、「事件が語る生と死」、「少年被疑者」、「女と男」の検事調査」がある。